
白き鳩の如し木蓮に願う～銀時、一大企画始動？～

草紙屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き鳩の如し木蓮に願うゝ銀時、一大企画始動？ゝ

【Nコード】

N 6 5 1 3 M

【作者名】

草紙屋本舗

【あらすじ】

久しぶりの銀ちゃんストーリーであります。が、本当のヒーローはマダオこと、長谷川泰三か？否や。個人的にはすごく好きなおっさん、泰三さん。彼にはせめて御伽草紙の中だけでも幸せになってほしくて、こんなんストーリーになりました（笑）。銀ちゃん、ちよつととまどい気味のテンションですが、これはまだ序章。次回作では、男っぴりをあげた銀ちゃんストーリーを展開する予定です。押忍

「…なあ、ちょっと相談にのってほしいんだけど…。時間つくれないかなあ？」

電話の向こうの泰三は、いつにもまして困惑しきつた声を出していた。

「…金なら、ねエよ？」

「ちがうちがう！ってか、金ならこっちもねエけど、もっと大変なことがおきちゃってさあ…」

「…ふうん。で、いつがいいわけエ？」

「できるだけ早く！なんなら今晚にでも会ってくんないかな？だめ？」

泰三はよほど切羽詰まっているらしい。必死の様相が、電話越しにも伝わってくる。

「じゃあ、夕方くらいイ？六時頃オ？場所はうちの下…」

「あーだめだめだめ！お登勢さんの店は却下、却下！

人に聞かれたくない相談だから！ほんとまじでヤバいから！」

「…ったく、めんどくせエなア。じゃあどこオ？どこならいいわけエ？」

「…あ、ずっと前、いっしょに行ったおでん屋あるじゃん、屋台のおでん屋！」

なんかハードボイルドがどーのこーの言う刑事が前来てて、銀さんが超つっこんでたあのおでん屋！あそこで会おうよ？ね？ね？」

「あそこ、カブキ町から行くのめんどくせエだよねエ…」

「そこをなんとか、頼むよ、銀さん！お願い！ね？ね？」

「…わあった、わあったよ。じゃあ、六時にあのおでん屋ね？」

「ありがと！恩にきる、銀さん！じゃあまた、あとで！」

受話器をおいて、懐手のまま泰三の言っていたヤバいことについ

て、銀時はいろいろ考えを巡らしてみた。金でもないとなると…なんだ、女か？それくらいしか思いつかねエが、あいつにそんな甲斐性があるかア？逡巡しながら考え込んでいると、彼女が話しかけてきた。

「今晚、お出掛けですか？」

「あ、うん、そうそう。マダオがなんか相談してエことがあるんだってさ。」

金じゃねエって言ってたから、どうせたいしたことアねエしようもねエ相談だと思うけどオ。

約束しちゃったんで、とりあえず行ってくるわア」

「…帰りは何時頃でしょう？」

「そうねエ、相手がマダオだからねエ…ちょっと見当つかねエかもなア。」

あ、なんか今晚約束してたっけ？もしかして、俺、忘れちゃってたっけエ？」

「ううん、違います、違います！今日、ちょっと私も銀時さまに相談したいことがあったから…」

「なになに？今じゃだめなのオ？」

おめエの相談なら、いつでも聞くって…ってか、夫婦なんだから遠慮しないでッ。

もう！銀さんの胸にとびこんでおいでッ！」

そう言いながら彼女の腕をとり、くいつと自分の胸に引き寄せる。ふんわりとやさしく抱き、彼女のつやつやした髪をなでながら銀時は繰り返した。

「相談したいことってなアに？」

「もうちょっとしないと、相談しにくいというか…」

「ちよつと何それエ？すっごい気になるんですけどオ？」

なんかもう気になってハゲそうな勢いなんですけどオ！」

「長谷川様のご相談に比べたら、わたしの相談なんて屁のカッパくらいなもんです。」

銀時さま、長谷川様が安心できるように、ここはひとつ万事屋主人としてバシツと決めてきてくださいませね？」

「いや、もうおめエの相談したいことの方が気になって気になって、きがきでねエっていうか、もう落ち着かないンですけどオ。

お願いッ、ちょこつとだけでいいからア、相談事のさわりだけでも聞かせて？」

「もう、銀時さまつたら…。わかりました。じゃあ、さわりだけ。

…10月頃の相談です。はい、おしまい」

「…って、ほんとにさわりだけエ？しかも10月頃って。全ッ然、わっかんねエ…うわア気になる！」

「今晚、銀時さまがお戻りになったら、詳細が判明いたしますから。乞うご期待です、ふふふ」

「…わあつた。マダオの方はもうチョツパヤでさくさくさくーと片して帰ってくつから！」

だから、ちゃんと今晚、相談事聞かせてよオ？」

「はい」

そんなこんなを経て、銀時はぶらぶらと泰三との待ち合わせの店に向かっているところだ。四ツ角を曲がり、細道に入るとおでんの文字の提灯と、わずかにはためく暖簾が見えた。

「…こんばんはア」

そう言いながら、暖簾をくぐりカウンターに目をやると、泰三がすでにグラスを手に座っていた。

「…おッ！お早いおつきで…」

「もう、待ちきれなくて早めに来ちゃったよ…銀さん、まいったよ、俺…」

グラサンの奥の困りきつた目を潤ませながら、早速銀時に愚痴をこぼす泰三だ。

「まアまアまアまア、まア待て。俺の酒がくるまで待て」

冷やの徳利を頼み、適当におでんのネタをみつくりてもらつ。

お待たせ…との声と同時に猪口と徳利を受け取り、猪口に酒を注ぐ。

「…よっしゃア、はい、お待たせエ。いろいろあんだろつが、まずは乾杯といこうや」

銀時の猪口に、しぶしぶ泰三が焼酎割が入ったグラスをあわせる。

「はい、かんぱアーい…」

一口くぱり、うめエと銀時がつぶやくのも待ちきれない様子で、泰三が話し始めた。本人が話していたように確かに金の話ではなかった。…が、これもまたやはり本人の言った通り、金でなんとかする話でもない相談事が、泰三の口から話された。

「…実は、ハツのことの相談だ。ああ、ハツってエのは、俺の別れた女房で…」

「知ってるから。で、そのハっちゃんがどうしたよ？」

「そんなたこ焼き屋みてエな言い方はよしてくれよ…ってか、そのハツから今朝早く連絡があつてさ」

「おう、何だつてエ？まさか復縁してエとか？」

「…いや」

「じゃあ、何て？」

「妊娠したつて」

「誰が？」

「ハツが」

「妊娠つて…ベイベーですか…」

「ああ。もう四ヶ月だつて」

「…へえ。で、相手はだアレ？」

「…俺」

「へ？」

「おなかの中の赤ん坊の父親は、俺だつて！」

「…まじで？」

「まじで。ハツがそう言うんだから間違いねえよ…」

「ってか、いやいや、あんた！そいう覚えがあるわけエ？」

赤ちゃんが生まれてきちゃうようなア、そういう覚えがあるわけエ？」

「…ん。一回だけだな…」

泰三の返事を聞いて、銀時は手から猪口を取り落としそうになった。

「あんたら、離婚して別居してンじゃなかったっけエ？」

「…ん。そう別居してる」

「なのに、なんでそんな覚えがあることになっちゃうわけエ？」

「だって、銀さん結婚しちゃうんだもん」

「はあ？」

「去年の１１月に結婚式あげたでしょ、銀さん。」

俺さあ式ン時、なんだかすんごく嬉しくなっちゃって、すっごい呑んでしまったじゃない？

で、その勢いでハツんとこ行っちゃってさあ…

なんかそのままハツと仲良くしてしまったみたいなんだよねえ…」

「…覚えてねエのかよッ！」

「朝、目を覚ましたら、朝飯と合鍵が置いてあって“ゆうべのことはお互いにオトナの過ちとして、忘れましょう。ごはんを食べたら帰ってください。鍵はポストに入れておいてください。”って置手紙があつて、それっきりだったんだよあ…」

「なあなあ、ほんとにまじで覚えてないわけエ？」

「うん…。すっごくあつたかくて、すっごくやさしいキモチになったのは覚えてんだけどね」

「あらららア…」

「で、ハツが言うには、どうやらそんな時にこどもができたらしくてハツはひとりでもいいから産む、って連絡してきたわけよ。で、俺、どうしたらいいかわかんなくなっちゃってさあ…」

「あ、そういうことなわけね…」

銀時はアタマをわしゃわしゃかくと、猪口のなかみをぐっと飲み干した。

「にしても、おめエの別れたカミさん、肝が据わってんなア。ひとりでもいいから産む、ってかア。しかもあんたみたいなマダオのこどもをねエ……」

「ほんとさあ、俺みたいなマダオのこどもなのに、産むって言うんだよ……」

「で、あんたはどうしたいのオ？」

「……………」

「カミさんはひとりでも産むって言ってんなら、別にいんじゃないのオ？」

「ぎ、銀さんッ、俺、ハツのそばにいてやりてえ。」

なんにもできねえかもしれねえが、こんな俺のこどもを産んでくれるっていうんだ。

せめてそばにいてやりてエんだよ！

でも正直、仕事も金もねエ俺だ。ハツが喜んで迎えてくれるはずもねエ。

いったい俺はどうしたらいいか、すっかりわかんなくなっちゃまってさ……銀さん、俺どうしたらいいんだろ？」

泰三はグラサンをかけたまま、泣いていた。バカ、泣いてんじゃないよ……とこづくと、泣き笑いの顔で泰三は鼻をすすりながら言う。「ごめんな？銀さんに相談してもどうしようもねえってことくらい、俺もわかってんだけどさあ。」

誰かに相談しねえと、なんかもうどうしようもなかったんだ」

「どうしようもねえ時だからこそその万事屋でしょうが……。遠慮してんじゃないよ」

「へへ、そっかあ……」

しゅん、と鼻をすすりながらも泰三は、何かを決意した様子で焼酎割のグラスを見つめながらこう言った。

「……銀さん、そんでさあ、悪いんだけどさあ……」

「……とりあえずいくらありやア、いいんだ？」

「……いやッ、銀さんには借りられねえよ？いや借りる気ないしッ！

俺は当座の金を貸してくれそんな人を紹介してほしいッて頼むつもりだったしッ！」

「だからア、いくら必要なわけエ？」

その時、カウンターの向こう側からどさり、とブ厚い封筒がふたりの前に置かれた。

「なんですか、これはア」

「…まったくもって僭越ながら、おでん屋のおやじからのご祝儀でさア。」

何も言わずに受け取っておくんなせい」

「…ご、ご祝儀って？」

「はばかりながら、おまえさんたちの話をおでんを煮込みながら聞かせてもらいやした。」

で、ちよっと思うところありまして…心ばかりの額ですが、ご祝儀を包まさせていただきやした。

遠慮なく、笑って受け取ってやっておくんなせい…」

「ちよ、ちよっ！おやじさん！そんな見ず知らずの人からもらえないよ？」

「…なアに、いんでさア。あっしはおでん屋稼業で身の丈にあつた充分な暮らしをしている。」

ご祝儀として差し上げたもんは、あっしの手許にあっちゃいけねエ金だ。

もつと必要としている人に使ってもらわなきゃいけねエ金だ。

だから、今、目の前にいるあんたに受け取ってもらいてエんで…」

「ちよっ、銀さん！この人、全然話聞いてくれないんだけど！」

「…なるほどねエ。そういうことですか…マダオオ、いいから黙ってもらつとけエ。」

これはおまえがもらつていいんだよう。

おやじの言う通りに、ただ笑ってありがと、助かるぜともらつときゃいいんだよう…」

銀時は手酌で酒をつぎ、猪口をあおった。泰三はいまだに状況が

つかめず、え？どういうこと？なに？どうすりやいいの？と困惑しきりの様子だ。

「そんなこと言っただって…。あーなんかもう、俺、狐につままれたような気分なんですけどッ？」

銀時から無理やり手渡された封筒を手にし、泰三がやけくそ気味に言い放つ。

「狐？いいんじゃないのオ？」

銀時がニヤリと笑って、おやじを見やる。

「そうそう、狐に騙されたってことでそっくりそのままそれを持って、おかみさんのところへまっすぐ行ってやんなせイ？」

なアに、最初はこっぴどく断られるかもしれねエが、女は口説き落としてなんぼだ。

一生懸命、言葉を尽くせばきつと迎え入れてもらえまさら…」

屋台の骨組み上部には狐のお面が飾ってある。そのお面を見ながら、おやじは言った。

「稲荷大明神様もきつと見守ってくたさるでしょうよ…」

そうかなあ…そうか？と半信半疑ながらも泰三はご祝儀を受け取り、それを見届けた銀時がよし、明日の前祝だ、と称して酒をさらに注文する。

「銀さん、俺、とうとう父親になるんだねえ…」

「ああ、マダオだけだな」

「俺、自信なんてまるつきりないけど…」

「ああ、マダオだからね」

「こどもが一人前になるまで、ずっとそばにいてやりてえよ」

「うんうん…マダオだけだね」

杯を重ねるうちに、話題は銀時自身のことになった。

「俺はともかくとしてえ、銀さんともそろそろじゃねえのお？」

「…あ？なにが？」

「こーどーも。ふたりの赤ちゃんだよお」

「あ、ああ、こどもね…」

「まだ作らないのお？」

「いやだって、あんた、味噌汁じゃねエんだから。」

作るか？はい、できましたアってできるもんでもねエでしょうが

…」

「だけどさあ、銀さんはともかくとして銀さんの奥さん、可愛いからさあ…」

きつとすつごい可愛い赤ちゃん生まれてくるよ、きつと…」

そんなことはわかってる、と言いそうになり、銀時はその言葉を酒といっしょに飲み込んだ。冷やが喉越しにつたっていくのを感じながら、銀時はふと最近気になっていることを、ついついぼろりともらしてしまった。

「だつてさあ、最近、うちの奥さん、ちよつと冷たいんだもん…」

「え、なにになにい？冷たいって、どういうことお？」

「結婚したての頃はア、もうすんごい仲良かったのにイ、ここ一ヶ月くらい、俺に冷たいんだもん…」

「冷たいって、どんくらい冷たいのよ？」

「朝とか、夜とか、毎日でも仲良くしてたのにイ。」

「ここんとはなんか体の調子が悪いみたいでエ、ごめんなさいつてずつと言われてるんだけどオ…」

「…あー、そりゃ凹むわあ…」

「でしょオ？もうなんか、俺になんか悪いとこあつたら正直に言うてよツ！って感じなんですけどオ…」

ぐいつと猪口をあおる。そんな銀時をじつと見ていたおやじが、何か思いついたように声をかけた。

「万事屋の旦那、御新造さん他に何かおっしゃってなかったのかい？」

「なアにイもオ。なアーンにも言っていないですウ。俺、嫌われちゃったア？」

「ほんとに何も？」

「…あ、今朝そういえばマダオと会う約束した後で、わたしも相談事があるって言ってたけどオ」

ガタ！と椅子を蹴りかねない勢いでおやじが立ち上がる。

「万事屋の旦那、しのこの言わずにさつさと家にお帰りなせエ！

悪イこたア言わねエ、マダオにつきあってるこたアねエよツ！」

「あ、なになに、なんでおやじまで俺のこと、マダオって言うのお？ひどいよお！」

その時、屋台の暖簾の細い隙間から銀時の首筋に沿って刀がつきつけられた。おやじがすつと懷に手をしのばせ、構える。泰三は酔眼を見開き、ただただ驚愕するばかりだ。銀時は猪口を手にしたまま、びくともせずに刀身に手をあて、ゆっくり口を開いた。

「ったく、こちらら愉快に呑んでるってエのに、野暮だねエ。ゴリラを頭にもつと、これだから…」

暖簾をめくり、刀をぴたりとあてたまま十四郎が姿を現す。

「おい、てめエ、こんなところで何してやがる…」

「何って、見てわからないですかア？僕たち、楽しくお酒を呑んでいるンですどオ？」

「耳の穴、かつぼじって聞きやがれイ…」

つい先刻、カブキ町の区役所通りで買い物帰りの女子がひったくりにあつてな、転倒したのよ。

その際、頭をひどく打つたらしく意識不明で病院に運ばれた。身許確認のため、しょうがねエ、所持品を調べたら連絡先が万事屋、次に松平のおやっさん、その次が真選組になっていた。万事屋は連絡とれず、松平のおやっさんは家族旅行中。で、真選組に連絡が来たわけだ…

万事屋アアアツ！てめエの恋女房が意識不明で病院に担ぎ込まれてるってエのに、酒かつくらつてる場合かアアツ！」

十四郎の激しい叱責に、思わず顔を失いかけたが、銀時はすくっと立ち上がる。

「…場所はどこだ」

「あ？」

「病院の場所はどこだツつてんだア、このボケカスがアツ！」

十四郎の胸倉をつかみ、銀時が咆えた。あつという間に目が血走り、荒い息をつきながら問いかける。

「酒臭エ息ふきかけんじゃねエよ…。パトカーで送ってやつから、ついて来な」

泰三にちらと目をやる銀時。銀時の視線にうなづく泰三。

長五郎も心配そうな顔をしながらも、大きくうなづく。

「万事屋の旦那、心配なさるんじゃねエ。まずは急いでそばにお行きなせエ、早く早く！」

十四郎に肩をこづかれるようにパトカーに乗り込む。移動中、むつつり黙り込むふたり。運転をしている山崎がちらちらとバックミラーで、ふたりの様子をのぞきこんでいる。

「こうなんじゃねエかと心配していたら…」

舌打ちまじりに十四郎が、腹立たしげに言う。

「幸せにするどころか、不幸にしてンじゃねエか…！ たくよツ！」

銀時は目を閉じたまま何も答えない。なおも十四郎が言い募ろうとしたその時、銀時が目を開けた。

「あいつは死なねエよ」

「は？」

「だって、俺の中のあいつがそう言ってるんだもん」

「…ツ。意味、わっかんねエし…」

病院の夜間救急受付の入り口から、銀時、十四郎がもどかしげに中に駆け込んで行く。

受付で彼女が治療室から病室に移ったことを聞き、病室の番号を確認、階段を駆け上るふたり。病室の前には神楽と、お登勢、お妙が心配そうに立っていた。

「…銀時ツ！ いったいぜんたい、いままでどこにいたんだいッ！」

「バカだろ、おまえバカだろ！嫁の一大事にどこで何してたアルかッ！」

「一発、お見舞いしてさしあげましょうか？ねえ、銀さん？」

銀時の姿を見るなり、三人が一斉に文句を言ってきたので彼女の病状などわかりやしない。

「ッだアッ！ひとりひとりしゃべりやがれッ！つてか、具合はッ！」
「つい今しがた、意識が戻ってね。今、お医者様が診てくださってるよ」

お登勢が答えた。意識は戻った…よかった。銀時はその場にしゃがみこみそうなくらい、ほっとした。あいつに何かあったら、生きちゃいらねエ…そんなことまで思っていただけに、ほんとうに心の底からほっとした銀時だった。

「それはいいんだが…他に骨折とか外傷はないのか？」

もちろん頭を打っているから、それも心配だろうが…」

十四郎がお登勢に尋ねる。お登勢は黙って首をふった。

「どうにもこうにもわかんないのさ…。今、目を覚ましたばかりだし」

「そうか…」

にわかに病室の出入り口に人の気配がし、カチャと扉が開く。看護師と医師が出てきた。付近にたたずむ付き添いたちを見て、医師がちよっと驚いたようにしながらも聞いてきた。

「ご家族の方は…？」

「…はい」

懐手を取り出し、ふらりと医師の前に銀時が歩みを進める。

「ご主人様ですね？」

「はい」

「ご安心ください。脳の検査結果も大丈夫、問題ありませんでした」
一同から、ああ、おおといった安堵の声がもれる。銀時も感謝の意をこめて、深々と医師に向かって頭を下げた。医師はいやいや、そんな…と言いながら言葉を続ける。

「ただ、今はほんとうに注意をしなければならない時期です。ご主人も、そのところをちゃんと肝に銘じてくだらないといけませんか……」

「あのオ、すんません……ちよつと話が見えないンスけどオ……」

「ん？ご主人、奥様は今、妊娠三ヶ月に入っているので、母子ともに大切な時期なんですよ？」

「……ニンシン？」

お登勢が銀時の腕をぎゅつとつかみながら、言う。

「おめでただよ、おめでた！銀時、あんた、父親になるんだよッ！」

「え？何、何？俺が？いつ？」

「くわしいことは、明日再検査してみないとわかりませんが、おそらく十月頃が出産予定かと思われそうですよ？」

につこり笑って、医師が祝福の言葉を銀時にかける。神楽やお妙は手を取り合って喜び、お登勢は早速、メールでキヤサリンやたま、マドモーゼル西郷らに懐妊のことを知らせている。頭をわしゃわしゃとかきながら、赤ん坊かア、そうかアと呟く銀時の肩をぽん、と十四郎がたたく。

「ったく、どこまで人騒がせなんだツつの……。松平のとつつあんには、俺からフオローいれとつから、明日にでも、ちゃんと赤ん坊のこと報告しとけや」

「……ああ、すまねエな」

「じゃ、俺ア、屯所に戻らしてもらっわ」

「ああ……おいッ！ちよい待てッ！」

「……あ？」

「ありがとな？金木犀の時以来だな、てめエにこづかれんのは……」

「ぬかせ……。もうたいがいにしてほしいもんだぜ、あんたら夫婦の厄介事はよオ」

そう言って十四郎は去っていった。その後姿を見送り、銀時はそつと病室に入る。奥のブースで彼女が横たわっているのが見える。

まぶたを閉じて、点滴を受けながら寝入っているようだ。銀時はそつと頬をなで、そのまま病室から出ようとした。すると、彼女が小さな声で話しかけてきた。

「…銀時さま？」

「うお。眠ってたんじゃないの？」

「ぼうつとしてますが、大丈夫。起きてます」

「…ごめんな？ 呑んでくれてて」

「私こそ。ぼんやりしてて、こんなことに。心配かけて、ごめんなさい」

「…無事でよかったア」

「…聞いちゃいました？」

「ん？何を？」

「…赤ちゃんのこと」

銀時は黙って彼女の前髪をなでた。そうしておもむろにニヤリと笑った。

「おう、聞いたぜイ。でも、もっかいおめエの口から聞かせてもらいてエな？」

彼女は嬉しそうに笑うと、銀時の手をとって言う。

「銀時さま？」

「ん？」

「とうとうサラサラストレートヘアプロジェクトが始動しますよ？」

「おっ？」

「銀時さまと私の赤ちゃんが、とうとうここにやってきました！」

「おお！」

「サラッサラのストレートヘアの赤ちゃんになってもらうために、これからは毎日、父上の銀時さまから気をおなかに送ってもらわねばなりません。どうぞよろしゅうお願いいたします」

「承知したッ！」

そう言って銀時は身をかがめて、彼女にキスをする。そしてベッド上で頬杖をついたままの姿勢で、嬉しそうに言う。

「絶対、サラッサラのストレートにしてやんないとな！」

「正直、ふわっふわのくしゅくしゅも好きなんですけど…」

「いやサラッサラのストレートオンリーで！」

彼女の病室から白木蓮の木立が見える。夜目にも明るく、真っ白い花が咲き誇っている様子は、まるでふたりを祝福する拍手の手のようにも見えた。

「そういえばさア、泰三の相談事なだけでさア…」

「いかがでした？」

「泰三ンともおめでたなんだってさ！」

「ええ？相手は？」

「別れてたって、何してたって、泰三の女房はハツ殿以外にいねエし」

「あ、じゃ、ハツ様と復活愛？」

「そうなるといいよなア…」

白木蓮の花を見つめながら、銀時間がぼつり言う。

「この花が咲くと、昔の人は田植えをしなきゃアって思ったンだって松陽先生から聞いたこと、あんなア…。あと、この花が上向いてきちんときく姿を、源氏の真つ白な旗印と間違えて平氏の侍がこれまで、と自決しちゃった…とかつて話も聞いたなア…なんかさア、かわいそうって思ったっけな…」

松陽のことを思い出してか、銀時がちよつとせつなさそうな顔をしているのを見て、彼女は銀時の手をそつと握った。

「そういうことも全部、全部たくさん銀時さまが教えてあげてくださいね…」

“天に飛びたつ銀の鳩、天からおりた天の鳩” 童話の中で、そう歌われる花、白木蓮。銀時と彼女は手を取りあってその白く天に向かって咲く花を、いつまでも見ていた。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6513m/>

白き鳩の如し木蓮に願う～銀時、一大企画始動？～

2010年10月8日14時13分発行